

「早期肝癌と類似病変の病理」

久留米大学教授・病理学第1講座 神代 正道 著

奈良県立医科大学学長

辻 井 正

今般、久留米大学病理学教授・神代正道著「早期肝癌と類似病変の病理」が医学書院から出版された。著者は、病理学の道一筋に歩んでこられ、特に肝癌の病理においては第一人者と目される存在である。なかでも「早期肝癌と類似病変の病理」は著者が最も力を注いでこられた研究テーマであり、本書は長年にわたる研究の節目としてまとめられた集大成であろう。われわれ肝臓病の臨床に携わる者は、各種講演会において著者の講演を聴き、また学術誌などで教わる機会が多いが、それらは、その時々に応じて的を絞った部分的な内容であり、著者の膨大な知見を断片的に理解するにとどまる向きもあった。しかし今回、肝癌の病理に関して系統的に、そしてすべてを網羅して論述された本書が発刊されたことは、肝臓学を学ぶ者にとって正に福音と言っても過言ではない。

今日、既にウイルス肝炎の予防がほぼ確立されたため、新規感染者は極めて少ないが、既感染による肝炎ウイルス保有者はB型200万人、C型230万人と言われている。自然治癒あるいはインターフェロン治療によって治癒する者もいるが、肝癌による死亡数は直線的に増加してお

り、現在の肝炎罹患者が早晚、肝硬変、肝癌へ進むことを予想して対策を講じる必要がある。それには肝癌の早期診断、早期治療が、対策の1つとして重要な意味を持つ。

現在、画像診断の進歩、特に超音波検査の普及によって、細小、微小、早期の肝癌が検出される頻度が高まり、加えて安全かつ正確な生検技法も開発され、種々の効果的治療法の登場と相まって、従来に比べて肝癌対策も向上したと言える。しかし、早期癌の診断には困難を伴うことも多く、生検にゆだねたとしても判定はときに難しいことがある。したがって、確信を得るためには早期肝癌をめぐる豊富な知識が要求されることになる。

本書では、早期肝癌の形態的な種々相を余すことなく提示し、肉眼的、組織学的特徴を精度の高い写真と共に示し、説得力のある解説がなされている。また、それぞれ必要に応じて、肝エコー像を配置し、ときにコンピュータ画像解析を加えて、肉眼所見、組織所見と対比し、各情報を相互にフィードバックできるように配慮されている。文中、特に早期癌の脱分化と増殖、早期癌の多中心性発生をめぐるのは、病理形態学

的実証を背景に、理路整然とした論理を展開されており、読む者に十分な理解と納得を与えてくれる。

ちなみに、本書の記載項目の概要を紹介しておく、本書は2つのセッションから構成されており、Iは早期癌の病理、IIは早期癌の類似病変である。Iには早期癌のそれぞれ臨床病理学的現況、病理形態(肉眼、組織)、超音波誘導下生検診断、血管構築、病理形態と超音波像、脱分化と増殖、背景病変、エタノール注入による形態変化などが含まれており、IIには肝細胞の結節性過形成病変、非腫瘍性結節性病変、腫瘍性病変が含まれている。I、IIともに細項目を設けて、更に詳しく述べられている。

以上、本書は著者が今日まで蓄積した知見を元に、基礎病理のみならず、臨床病理の立場に立って執筆されたものであり、これからまだまだ増加が予想される肝癌対策のうえで、われわれに有益な知識と示唆を与えてくれる正に必携の書であると評価する。

● B5 頁238 図9 写真16
原色図240 1996 定価13,390円
(税込) 7400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)